



旅館
寺田屋

寺田屋

旅館

寺田屋

POST
26696

26696



丹羽社会保険労務士事務所

SECOM

寺田屋

旅館
寺田屋

辻文



266936

丹羽



龍籠
寺田屋

刀痕は
川つ木
寺田屋
空之柱
野川

史蹟
寺田屋

有染格

不之格

旅籠
寺田屋

刀痕は
いつか
寸白を
空に
野に

史蹟
寺田屋

はばやまね
住民の立場でしかりなく
CSUの指導をうけること
日本共産党



刀痕は
川つ木
寸田屋
空柱
野は呂

史蹟寺田屋

津

空柱

不老

月夜



寺田寺

旅籠

参観入口
商中

寺田屋

伏見寺田屋宿九段之石

寺田屋騒動址

てらだやそうどうあと

文久二年（一八六二）四月、尊皇攘夷派の先鋒であった薩摩藩士九名が殺傷されるといふ明治維新史上有名な寺田屋騒動が起こった所である。

当時、薩摩藩には藩主の父、島津久光を中心とする公武合体を奉ずる温和派と、勤王討幕を主張する急進派との二派があったが、久光は急進派の動きを押えようとして、兵千余名を率い京都へ入洛せんとした。これを知った有馬新七ら三十余名の急進派同志は、文久二年（一八六二）四月二十三日、関白九条尚忠なのおただ、所司代酒井忠義を殺害すべく、薩摩藩の船宿であった寺田屋伊助方に集まった。これを知った久光は藩士奈良原ら八名を派遣し、新七らの計画を断念さすべく説得に努めたが失敗、遂に乱闘となり新七ら七名が斬られ、二人は重傷を負い、翌日切腹した。

後ろの広場にある殉難碑は明治二十七年（一八九四）の建立で、有栖川宮熾仁親王の筆になる篆額を掲げる。

京都市

Ruins of the Terada-ya inn rebellion

In April of the 2nd year of Bunkyo (1862), the Terada-ya Inn was the site of a famous historical rebellion of the Meiji Restoration. Nine feudal retainers from Satsuma province were wounded and killed at the peak of the anti-foreigner factions' power.

Afterwards, in the 27th year of Meiji (1894), a monument to these martyrs was erected in a nearby square. On this monument is an inscription written by Prince Arisuzawa-no-miya Taruhito, Kyoto City.

寺田屋騒動址

文久2年（1862）4月、此地发生了明治維新史上有名な、尊皇攘夷派の先鋒薩摩藩士9人死傷の寺田屋騒動。后面広場上の殉難碑は明治27年（1894）、皇孫有栖川宮熾仁親王の筆による篆額を掲げている。

京都市

테라다야(寺田屋)소문 유적지

문주(文久)2년(1862)4월, 존황강이포의 선봉이었던 사쓰마영사(薩摩藩士)중 9명이 살상되었다는, 메이지유신(明治維新) 사상 유례없는 테라다야소동이 일어난 곳이다.

후에 광장에 있는 은남비는 메이지(明治) 27년(1894)에 건립되었으며 이 립스가와노미야 다루히토(有栖川宮熾仁) 친필의 순 장액(篆額)의 문어 전자로 쓰여진 표창이 걸려 있다. 교토시



坂本物与老翁

1871年

至名古屋
至東京

法興寺

外環状線

法界寺

洛南めぐり

至宇治
至奈良

名神高速道路

竹田街道

たけた

すみぞめ
良線
鉄

伏見桃山城

桃山御陵

乃木神社

京阪電車
国道24号線

ももやまこりょう
ま

かんげつきょう
京阪電車

宇治川

近畿
本鉄道

浄土寺

もしみやま

ちゅうしよしま

長慶寺

宝福寺

大手筋

国道1号線

枚方バイパス

鴨川

南センター
チエシ

念寺



さん じゅう こく ぶね
三十石船

三十石船とは、江戸時代に淀川を上下した客船である。乗客は、まず船宿に入り、それから乗船していた。寺田屋も有名な船宿の一つで、この付近には多くの船宿が並んでいた。淀川は平安時代以来船運が盛んで豊臣秀吉、次いで徳川家康が過書船の制度を定め、運賃や営業に対し税を課すなど取締りを行い、伏見大手筋には、過書船番所を設けていた。船の大きさは二十石積から三百石積で数百隻が運行し、貨物や旅客を運んでいた。その内三十石船は長さ約十七メートル、巾二・五メートル船頭四人定員二十八名の旅客専用船で上りは一日又は一夜下りは半日又は半夜で伏見と大阪天満の間を運行した。船賃は江戸時代中期で約五十文、途中枚方に立寄る。そこでは船客に「くらわんか」と声をかけながら、餅を売りにきた。そうした風俗や船内の様子は、落語や講談浪曲で有名である。なお三十石船は明治四年（一八七二）に廃船になった。

寺田屋

恩賜紀念之碑

山城國伏見町の寺田屋を著より淀川紅雲に旅宿を營とせし其弟六代乃主人伊助其喜
 也其は元治元年九月二十五歳に時夫を喪ひたきとえり法、和家堂城營み且性頗る
 義侯に富美たるも少なるらざり文久二年四月薩藩の有馬新七氏始九烈士が王事に殉じ
 受事たる者も少なるらざり文久二年四月薩藩の有馬新七氏始九烈士が王事に殉じ
 たりも此家よりして世に之を文久二年四月薩藩の有馬新七氏始九烈士が王事に殉じ
 家に潜りて天下の大事を謀りたるにせしを厚く之を庇ひて其後明治三十七年二月我邦の靈
 國と戦端を開かむとせし其月六日の夜不思議に
 皇后陛下相模國葉山の御周知にて 御夢に坂本氏の忠魂を認りてせし此意を以て
 わか其後念公事を以て關西地方に出張し京都より奈良に赴き遂次五月六日伏見町
 の大黒寺に詣り九烈士の墳墓を展し又寺田屋の遺跡を之を憶りて其夢を傳聞せし
 有馬氏の遺墨を携へて上京し會を訪むて其後尚斯るありて坂本氏より其夢を
 に贈りたる數通の書翰を示しり會之を展覧するに及む
 皇后陛下於 御夢を思合せ益々事の不思議なるに感たり言、
 陛下に 拜謁して右の次第を上聞し坂本氏の書翰を 御覽せ供、奉りたるに深く 御
 満足に 思召され又や其の義侯を嘉し給ひて八月二十五日皇后宮大夫子爵香川
 教三氏を以て念に 御内旨を傳へらるる且若干の 御賜ありしは伊助之誠を戴き
 實に格外の光榮と云ふべし伊助感泣の餘英一と相謀り其意を以て之に達せしめ
 る九烈士の碑の側に一碑を建てる 恩賜の念を以て紀念せむと云ふに之を乞ひし
 喜びて事の顛末を記し後川の清き流に永く之を傳へしむ
 明治三十七年十二月

適信大臣從三位勳一等大瀆兼武撰
 御歌所奉候正八位大日

石碑の上には



皇太后宮大夫子爵香川敬三氏ヨ功
 不慮ノ難ニ遭ヒタルヲ御哀悼
 兼武ニ文ヲ乞ヘリ為
 王事ニ殉セシモノヲ御追慕
 其美ヲ
 猶國
 一見頼
 右ノ次
 上聞
 本氏カ
 王事ニ
 中
 功ノ
 文久
 遂ニ不慮ノ難ニ遭ヒタルヲ御哀悼
 兼武ニ文ヲ乞ヘリ為
 王事ニ殉セシモノヲ御追慕
 其美ヲ
 猶國

近藤富壽書
 清純武撰

世の人はわれま

何ともえらばいへ

わがなすことは

我のみぞしる

飛馬

正四位勲四等文學博士川田則家
陸軍大将木勳位從仁親王家
從五位長良君
正四位勲四等文學博士川田則家
陸軍大将木勳位從仁親王家
從五位長良君
正四位勲四等文學博士川田則家
陸軍大将木勳位從仁親王家
從五位長良君



言ひの桶

坂本龍馬先生



士蹟蹟

大丈夫舉事不必身收其功使後人繼起以成吾志則元斷脰亦無所憾
焉何哉志在天下國家非為一身謀故也往時幕府失政內訌外侮衆心乖
離識者皆知起師問罪以復 王權之為急務然告之士大夫則曰時機未
至告之侯伯則曰時機未至乃告之公卿縉紳亦曰時機未至嗚呼坐待時
機日復一日孰能挺身發難於是薩藩九烈士糾合同志奮欲舉兵有司論
上不聽格鬪殞命予伏見逆旅寺田屋世或惜其徒歟無功殊大知一以
鼓動海內士氣是其素志他日于五條子生野云天王山豪傑踵起百折不
撓薩長諸藩亦出師勤 王成中興大業果不遠其所豫期歿者而有知應
含笑地下也九烈士者為誰曰有馬新七曰田中謙助曰橋口傳藏曰柴山
愛次郎曰弟子丸龍助曰橋口壯介曰西田直五郎曰森山新五左衛門曰
山本四郎其外實文久壬戌四月廿三日今茲甲午三十三回忌辰伏見人
追慕修祭建銅表于寺田屋遺址請文于余余嘗過宇治平等院甬源三位
故跡所謂扇芝者低徊不能去蓋壽永中平氏專橫賴朝義仲等舉兵討伐
以亾之然非三位首倡發難安能得遠奏偉勳此地距宇治咫尺而九烈士
事又相類焉故余揮筆大書表其功烈與扇芝竝傳美千載後人過此亦必
有低回不能去者矣
明治廿七年五月

參謀總長兼神宮祭主陸軍大將大勳位熾仁親王篆額
正四位勳四等文學博士川田剛撰
從五位長茂書

寺田屋遺蹟紀念碑

大丈夫舉事不必身收其功使後人繼起以成吾志
焉何哉志在天下國家非為一身謀故也往時幕府失政內訌外侮衆心乖
離識者皆知起師問罪以復王權之為急務然告之士大夫則曰時機未
至告之侯伯則曰時機未至乃告之公卿縉紳亦曰時機未至嗚呼坐待時
機日復一日孰能挺身發難於是薩藩九烈士糾合同志奮欲舉兵有司諭
上不聽格鬪殞命于伏見逆旅寺田屋世或惜其徒歿無功殊不知一死以
鼓動海內士氣是其素志他日子五條子生野于天王山豪傑踵起百折不
撓薩長諸藩亦出師勤王成中興大業果不違其所豫期歿者而有知應
含笑地下也九烈士者為誰曰有馬新七曰田中謙助曰橋口傳藏曰柴山
愛次郎曰弟子丸龍助曰橋口壯介曰西田直五郎曰森山新五左衛門曰
山本四郎其歿實文久壬戌四月廿三日今茲甲午三十三回忌辰伏見人
追慕修祭建銅表于寺田屋遺址請文于余余嘗過宇治平等院甕源三位
故跡所謂扇芝者低徊不能去蓋壽永中平氏專橫賴朝義仲等舉兵討伐
以亾之然非三位首倡發難安能得遽奏偉勳此地距宇治咫尺而九烈士
事又相類焉故余揮筆大書表其功烈與扇芝竝傳美千載後人過此亦必
有低回不能去者矣

明治廿七年五月

正四位勳四等文學博士川田剛撰

參謀總長兼神宮祭主陸軍大將大勳位熾仁親王篆額
從五位長茂書

寺田屋勤王紀念碑

ご案内

参観券は幕末往時の
土佐藩札をまねたものです

参観料

一般 400円

団体 360円
(団体料金は30名以上)

大学生 300円
(学生証を提示下さい)

高校生 300円

中学生 300円

小学生 200円

乳幼児 (入場できません)

小学生から入場できます

参観時間

午前10時から

午後3時40分受付終了

午後4時閉館

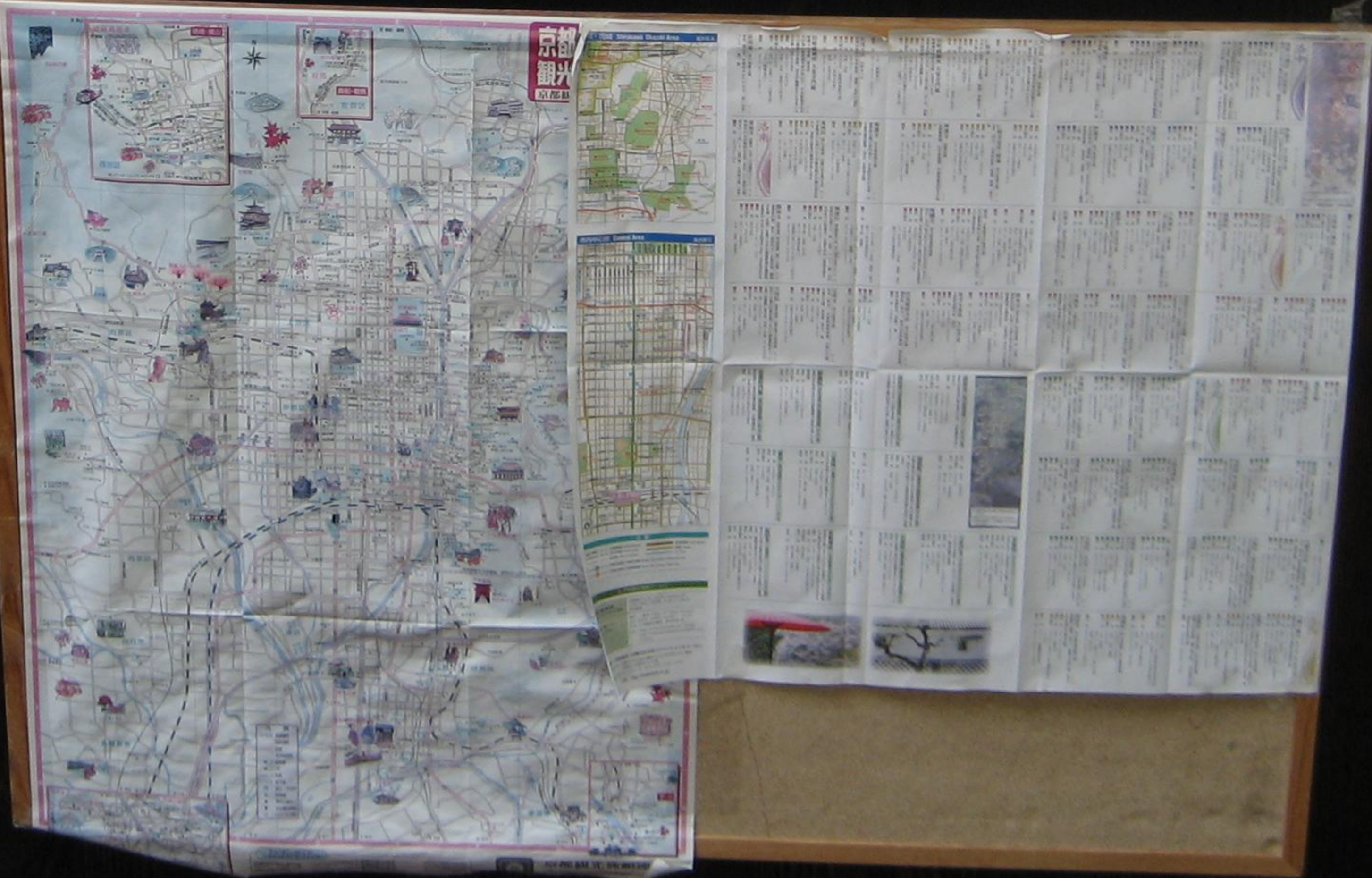


出口専用

入口は表通りにあります。
(団体様はこちらから)

商い中
入館は小学生以上です

冷暖房中



納

昭和五十二年九月七日 建之
寺田屋お登勢百年祭

奉

史蹟寺田屋保存会

...



史蹟
寺田屋
お登勢明神
由来がき
坂本龍馬とお登勢の縁を
結んだ寺田屋の女将
百年祭を記念に地
祭られ将来の石
守り神となり

雨犬